

第3章

2010年ビハール州議会選挙の結果とその分析

はじめに

2010年10月から11月にかけて行われたビハール州議会選挙は、かつてないほどの猛烈な「旋風」が吹き荒れる結果となった。なぜなら、ジャナター・ダル（統一派）（JD(U)）とインド人民党（BJP）の国民民主連合（NDA）が全議席の約85%を獲得するというこれまでに類を見ない圧倒的な勝利を収め、ニティーシュ・クマール州首相が続投することになったためである。その一方、民族ジャナター・ダル（RJD）と人民の力党（LJP）による連合をはじめとする野党勢力は与党連合の大躍進の陰に隠れ、まったくといっていいほど振るわなかった。

本章では、今回の州議会選挙の結果について説明したあと、JD(U)とBJPの与党連合に歴史的な大勝をもたらした要因を分析する。そして、特定の政党に投票する傾向がそれほど顕著ではない比較的流動性の高い社会集団の支持を積み重ねることによって野党勢力に対してわずかではあるが着実に差をつけたことが、与党連合の圧勝の重要な要因であると論じる。さらに、「開発」（development）に代わるような有力な争点を打ち出せないまま選挙戦に突入した野党勢力は、ニティーシュ政権の開発への取り組みに対して様々な角度から批判を加えたものの、それが説得力のある主張たりえなかったという点を指摘する。

1. 2010年州議会選挙の結果

(1) 与党連合の躍進と野党勢力の惨敗

2010年10月21日から11月20日までの1ヶ月間にわたって、6段階に分けてビハール州議会選挙が実施された⁽¹⁾。「これまでで最も平穏な選挙であった」とインド選挙委員会（Election Commission of India）が評したように、選挙戦および投票は大きな混乱もなく行われた⁽²⁾。投票率は52.71%と前回(2005年10～11月)の州議会選挙から6ポイント以上の上昇を見せた。

⁽¹⁾ 第1段階：10月21日（47選挙区）、第2段階：10月24日（45選挙区）、第3段階：10月28日（48選挙区）、第4段階：11月1日（42選挙区）、第5段階：11月9日（35選挙区）、第6段階：11月20日（26選挙区）。

⁽²⁾ “Most Peaceful Exercise Ever in Bihar, Says CEC,” *Hindu*, November 21, 2010 を参照。

表3 1 2010年ビハール州議会選挙の結果

	候補者数	当選者数	得票率
ジャナタ・ダル(統一派)	141 (+2)	115 (+27)	22.61 (+2.15)
インド人民党	102 (±0)	91 (+36)	16.46 (+0.81)
民族ジャナタ・ダル	168 (-7)	22 (-32)	18.84 (-4.61)
人民の力党	75 (-128)	3 (-7)	6.75 (-4.35)
インド国民会議派	243 (+192)	4 (-5)	8.38 (+2.29)
インド共産党	56 (+21)	1 (-2)	1.69 (+0.04)
インド共産党(マルクス主義)	30 (+20)	0 (-1)	0.71 (+0.04)

(出所) インド選挙委員会ホームページ(<http://eciresults.nic.in/>)を参考に作成。

(注) カッコ内の数字は、2005年10月の州議会選挙からの変化を表している。

すべての選挙区で投票が終了してから4日後の11月24日に開票作業が行われ、その結果、ジャナター・ダル(統一派)とインド人民党の与党連合が、243議席中206議席(JD(U)は115議席、BJPは91議席)を獲得するという圧倒的な勝利を収めた(表3-1)。これまでの州議会選挙でも、圧倒的多数の議席を獲得して勝利した政党は存在したが、約85%もの議席を占めるようなことは過去に例がなかった。

州議会選挙の結果を受けて、11月26日には、JD(U)のニティーシュ・クマールが再び州首相に就任し、ニティーシュ政権は2期目を迎えることとなった。また、1期目に引き続き、BJPのスシル・クマール・モディが州副首相に就任するとともに、その他に28名の閣僚が任命された。州首相と州副首相を含めた30名の閣僚のうち、20名がJD(U)所属、残る10名がBJP所属という構成となった⁽³⁾。

一方、与党連合の躍進とは対照的に野党勢力は軒並み議席数を大幅に減らし、予想外の惨敗を喫した。州政権の奪取を狙った民族ジャナター・ダルと人民の力党による野党連合は、RJD党首のラルー・プラサード・ヤーダヴを州首相候補とし、統一マニフェストを掲げて選挙戦に臨んだものの、全議席の約10%に相当する25議席(RJDは22議席、LJPは3議席)を獲得するにとどまった。また、農地改革委員会による勧告の即時実施を最重要の争点としていた左翼政党も大部分の議席を失い、インド共産党がわずかに1議席を死守したにすぎなかった。さらに、全選挙区に単独で候補者を擁立し、ビハール州での党勢の回復を狙ったインド国民会議派は、前回選挙をさらに下回る4議席しか獲得することができ

⁽³⁾ “Nitish Kumar Sworn in for a Second Term,” *Hindu*, November 27, 2010 を参照。

なかった⁽⁴⁾。このように、野党各党は与党連合の躍進に埋没する形となったのである。

なお、ビハール州については、「政治の犯罪化」(criminalization of politics) が極めて深刻な問題であるということがこれまでもたびたび指摘されてきた。この点に関しては、今回の州議会選挙を経てもあまり改善は見られないようである。例えば、今回の州議会選挙での立候補者および当選者の犯罪歴を調査した Association for Democratic Reforms [2010]によると、当選した州議会議員の約 58% (141 名) が犯罪に関連する容疑で係争中であり、そのうち 85 名 (全議員の約 35%) については、殺人、誘拐、恐喝などの重大な容疑によるものである。さらに、「法と秩序」(law and order) の面でのニティーシュ政権の実績を選挙戦でも盛んに強調していたにもかかわらず、JD(U)と BJP の与党連合から当選した全議員の約 35%にあたる 72 名 (JD(U)は 43 名、BJP は 29 名) は、上記のような重大な容疑で係争中であることが指摘されている。

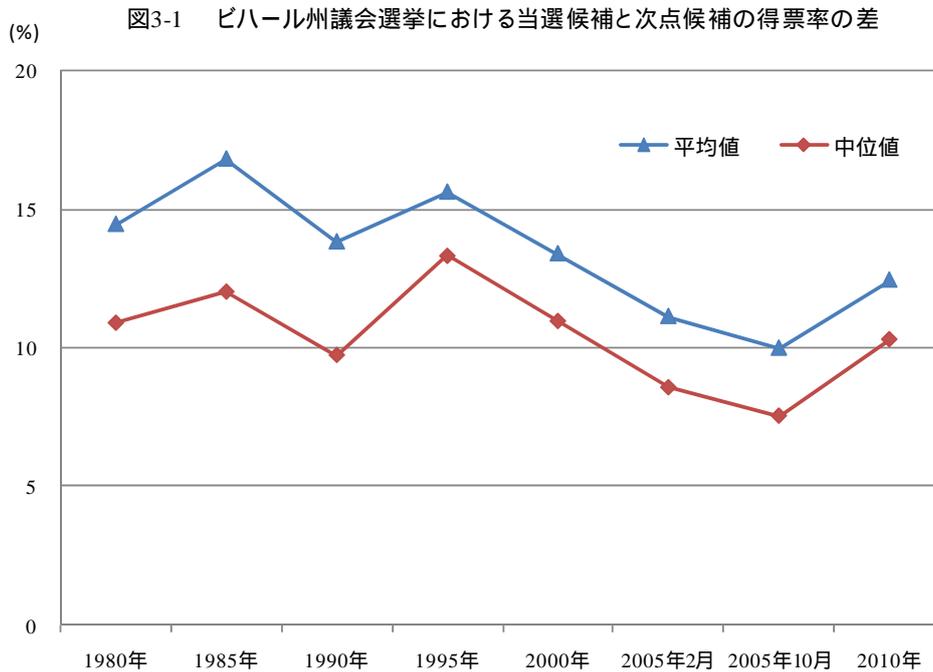
(2) 議席数と得票率の乖離

このように、獲得議席数に関しては与党連合と野党勢力の間に大きな差があるが、得票率にはそれに相当するような違いは認められないという点に注意が必要である。つまり、全議席の約 85%を獲得した JD(U)・BJP 連合の得票率は 39.1%である一方、全議席の約 10%しか獲得できなかった RJD・LJP 連合は全体の 25.3%の票を得ている。さらに、前回の州議会選挙と比較して、JD(U)と BJP の与党連合はあわせて 3 ポイント弱しか得票率を伸ばしていないという点にも注目すべきである (表 3-1)⁽⁵⁾。

これらの点を別な角度からも確認することができる。図 3-1 は、当選した候補者の得票率と次点の候補者の得票率の差 (「margin of victory」と呼ばれる指標) を過去 30 年間のビハール州議会選挙について示したものである。一見して明らかなように、得票率の差は縮小傾向にあり、州議会選挙における競争が徐々に激しくなっていることが読み取れる。特に、州議会において多数派を形成するような政党や政党連合が現れなかった 2005 年 2 月の州議会選挙とそれを受けて再度行われた同年 10 月の州議会選挙では、当選した候補者と次点の候補者の得票率はそれ以前の選挙と比較してより一層接近していたことがわかる。一方、今回の州議会選挙では、2005 年の州議会選挙よりも得票率の差が拡大している。ところが、与野党の獲得議席数の差が大きく開いている今回の選挙の方が、2000 年以前の州議会選挙よりも得票率の差は小さくなっている。

⁽⁴⁾ 今回の州議会選挙のために会議派全国委員会 (All India Congress Committee: AICC) から派遣されていた B. K. Hariprasad 氏 (AICC general secretary) は、選挙戦の序盤 (2010 年 10 月 28 日) に著者が行ったインタビューで、「会議派は 30 議席程度獲得する」と答え、ある程度の自信を見せていた。

⁽⁵⁾ Subrahmaniam [2010]は議席数と得票率の間の乖離を指摘しているが、それがどのような要因によって生み出されたものなのかという点については一切説明していない。



以上の点をまとめると、議席数と得票率の間の乖離を次のように説明することができる。2005年の州議会選挙では、わずかの得票率の差で当落が決まった選挙区が多数存在した。今回の州議会選挙では、与党連合は多くの選挙区においてごくわずかではあるが着実に得票率を伸ばしたため、前回の選挙では野党勢力が僅差で勝利していたような選挙区でも逆転現象が広範に見られるようになった。したがって、与党連合の得票率の伸びがあまり大きくなく、与党連合と野党勢力の得票率の差がそれほど顕著ではないにもかかわらず、与党連合は圧倒的な議席数を獲得するに至ったと考えられるのである。

2. 「開発」の重要性

多くの評論家やメディアが指摘しているように、ニティーシュ政権が強く打ち出してきた開発が今回の州議会選挙における与党連合の圧倒的勝利に重要な役割を果たしたと考えられる。つまり、ニティーシュ政権下での経済開発の面での実績を評価した結果、多数の有権者が与党連合に投票したということである。

では、具体的にどのような開発の側面が有権者によって評価されたのだろうか。また、州政権の開発への取り組みが選挙における中心的な争点になる中で、野党勢力はどのようにそれに対応し、結果として予想外の大敗北を喫したのだろうか。以下では、これらの点をそれぞれ検討していく。

表3 - 2 ニティッシュ政権の「開発」に対する評価

	ビハール州の 経済発展	道路	電力	学校・教育	病院・医療
改善した	324 (25.63)	1,003 (79.35)	286 (22.63)	814 (64.40)	701 (55.46)
変化なし	92 (7.28)	152 (12.03)	641 (50.71)	128 (10.13)	195 (15.43)
悪化した	67 (5.31)	65 (5.14)	280 (22.15)	230 (18.20)	98 (7.75)
無回答	781 (59.32)	44 (3.48)	57 (4.51)	92 (7.28)	270 (21.36)

(出所) 4つの選挙区で行ったサンプル調査で得られたデータに基づいている。

(注) 5年前と比較して各項目の状況がどのように変化したかを回答者に問うている。カッコ内の数字は全体に占める割合を表している。サンプル数は1,264である。

(1) 公共財の供給と「開発」

ニティッシュ政権による開発の成果を有権者が評価していることは、本報告書の著者が行ったサンプル調査の結果からも明らかである。表3-2は、開発に関連するいくつかの項目について、(ニティッシュ政権が成立する以前の)5年前と比較してどのように変化したかという質問に対する回答をまとめたものである。この表で示されている調査結果から、以下のような点を指摘することができる。

第一に、約8割もの回答者が過去5年間で道路の状況が改善したと答えているが、その一方で、電力の状況については評価が大きく分かれている。道路状況の改善に対する高い評価は、その他の公共財の供給に対する評価と比較しても抜きん出ている。道路整備を積極的に進めたことが与党連合の重要な勝因であると指摘するある新聞記事は、ビハール州内の道路の総延長は23,991キロにまで延びていると報じている⁽⁶⁾。これとは対照的に、電力状況については、「改善した」と「悪化した」がほぼ同数で、約半数の回答者が「変化なし」と答えている。また、聞き取り調査の際には、州議会選挙の数ヶ月前になってようやく電力が供給される時間が長くなったと答える回答者が多数見られた。

第二に、学校・教育と医療・病院の状況が改善したと答えた回答者はそれぞれ6割と5割を超えている。特に、学校・教育の状況が改善していると評価する主な理由としては、教員の増加、学校施設の改善、給食の提供、生徒への自転車の供与などが挙げられている。

第三に、開発に対する有権者の評価は、「ビハール州の経済発展」といった抽象的なもの

⁽⁶⁾ “Roads’ Brought Nitish back to Power,” *Hindu*, November 29, 2010 を参照。

ではなく、自身が生活するコミュニティーの周辺で見られる具体的な状況の改善（公共財の供給）に対するものであると考えられる。「5年前と比較して、経済発展の面でビハール州の状況は改善したか」という質問に対して、6割もの回答者が答えていないということは、多数の有権者が開発というものをビハール州全体の経済発展というような抽象的なレベルで捉えていないことを反映した結果だと見ることができる。

(2) 「開発」に埋没した野党

すでに述べたように、今回の州議会選挙では、与党連合の大躍進の陰に隠れて野党勢力はまったくといっていいほど存在感を発揮することができなかった。このような結果となった最大の理由は、開発に代わる有力な争点を打ち出すことができないまま選挙戦に突入した野党が、ニティッシュ政権の開発への取り組みを批判することに終始したためであると考えられる。

では、ニティッシュ政権の開発に対して野党勢力はどのような批判を展開し、なぜそれが有権者を納得させるには至らなかったのだろうか。州政権の開発に対する野党勢力の批判は、以下のようないくつかのパターンに分けられる。

第一に、ニティッシュ政権が主張するような開発の進展は実際には見られないという批判である。例えば、「開発が進んでいるのであれば、なぜ（ビハール州から他の地域への）労働移動がこれほど起こるのだろうか」といった発言などはその典型例であるといえるだろう⁽⁷⁾。確かに、ビハール州が経済開発や人間開発の面で依然として後進州であることには変わりはない。しかし、表3-2で示されているように、過去5年の間に様々な分野で改善が見られたとの評価が多数を占めていることも事実であり、開発は進んでいないという一方的な批判が有権者の間で大きな説得力を持つとは考えにくい。

第二に、中央政府から各種の開発事業に振り向けられている資金が州政府によって適切に活用されておらず、ニティッシュ政権の開発への取り組みは不十分なものであるという批判である。中央政権を握ってきた会議派は、特にこの点を繰り返し強調していた⁽⁸⁾。だが、第一のタイプの批判と同様、ニティッシュ政権下での開発の進展を評価する意見が多数を占めていることから考えて、このような主張が有権者の投票行動を大きく変えるほどの効果があったとはいえないだろう。

第三に、ビハール州で見られる開発の成果は、ニティッシュ政権に帰せられるべきものではないという批判である。会議派は、中央からの開発資金があったからこそビハール州で様々な開発事業を行うことが可能になったのであり、開発の進展は州政権の功績ではな

⁽⁷⁾ 会議派のラーフル・ガンディー (Rahul Gandhi) による発言 (“Rahul Attacks Nitish’s Double-speak on Secularism,” *Hindu*, October 15, 2010)。また、会議派総裁のソニア・ガンディー (Sonia Gandhi) による同様の発言については、“It’s ‘Tall Claims’, Nothing to Show for in Bihar,” *Hindu*, November 18, 2010 を参照。

⁽⁸⁾ “High Time to Install a New Government in Bihar: Rahul,” *Hindu*, September 5, 2010; “Nitish Regime Has no time Even to Spend Central Funds: Sonia,” *Hindu*, October 19, 2010 などを参照。

いと主張した⁽⁹⁾。また、RJD 所属の元下院議員は、「ニティーシュ政権下で道路整備が進んだのは、RJD が中央政権に参加していた時に関連予算の獲得に奔走したからだ」と述べ、道路整備が進んだことをあたかも自身の成果であるかのようにアピールするニティーシュ政権の姿勢を「陳腐な宣伝活動」(cheap marketing)だと非難した⁽¹⁰⁾。ただし、このような批判は有権者にとってはわかりにくい主張であるばかりでなく、メディア向けの政府広告を積極的に活用して開発の成果を有権者に訴える州政権の広報戦略に比べるとおよそ効果的であるとはいえない⁽¹¹⁾。事実、前述の RJD 所属の元下院議員は、「(JD(U)や BJP と比べると) RJD は広報活動が得意だとはいえない」と率直に認めている。

このように、開発に代わる有力な争点を打ち出すことができなかつた野党勢力はニティーシュ政権の開発への取り組みを様々な角度から攻撃したものの、それは説得力のある主張たりえなかつた。そのため、野党各党は開発に埋没するという結果となった。このような意味においても、今回の選挙で開発は極めて重要な意味を持ったと結論付けることができるのである。

3. 「アイデンティティ」は「開発」に取って代わられたのか

ニティーシュ政権が行ってきた開発への取り組み（特に、公共財の供給）に対して有権者が概して高い評価を与えていたことは、前節で示した通りである。では、ニティーシュ・クマール州首相が繰り返し強調しているように、カーストや宗教に基づく「アイデンティティの政治」は「開発の政治」に取って代われ、完全に姿を消してしまったのだろうか。答えは、「否」である。

発展途上社会研究センター (Centre for the Study of Developing Societies: CSDS) が今回の州議会選挙を対象に行ったサンプル調査によると、56%のヤーダヴが RJD に、55%のパスワンが RJD と LJP の野党連合に投票している [Kumar 2010]。これらの数字を見る限り、「アイデンティティの政治」は依然として非常に堅固であるように見える。また、候補者を選定する際の基準としてカーストや宗教などのアイデンティティが重要な役割を果たしていることは、新聞・雑誌などのメディアによる報道、政党の指導者や候補者へのインタビューなどからも明らかである⁽¹²⁾。

⁽⁹⁾ “Tall Claims, Counte-claims in Patna,” *Hindu*, July 10, 2010; “Nitish Locks Horns with Sonia over Central Funds,” *Hindu*, August 20, 2010 を参照。

⁽¹⁰⁾ Alok Kumar Mehta 氏 (national president, Yuva Rashtriya Janata Dal) へのインタビュー (2010年11月14日)。なお、Yuva Rashtriya Janata Dal は、RJD の青年部にあたる組織である。

⁽¹¹⁾ ニティーシュ政権が多額の予算を州政府の広報活動に費やしていることについては、“Nitish Kumar’s ‘Bihar Shining’ Campaign,” *The Hoot*, April 12, 2010 (<http://thehoot.org/web/home/story.php?storyid=4454&mod=1&pg=1§ionId=2&valid=true>) を参照。

⁽¹²⁾ “Bihar ‘Caste Bazaar’ Opens up Possibilities of Splits,” *Hindustan Times*, October 5, 2010 を参照。

表3 - 3 ムスリムの有権者による評価

	ムスリムの安全	宗教間の融和	ムスリムの影響力
改善した	65 (40.88)	72 (45.28)	36 (22.64)
変化なし	46 (28.93)	78 (49.06)	83 (52.20)
悪化した	8 (5.03)	6 (3.77)	18 (11.32)
無回答	40 (25.16)	3 (1.89)	22 (13.84)

(出所) 4つの選挙区で行ったサンプル調査で得られたデータに基づいている。

(注) 5年前と比較して各項目の状況がどのように変化したかを回答者に問うている。カッコ内の数字は全体に占める割合を表している。サンプル数は159である。

さらに、前章で詳しく論じたように、州政権の福祉政策が選挙における「勝利連合」の形成を目指して流動性の高い社会集団に狙いを定めたものであることから考えても、「ビハール政治において開発が中心的な課題となり、カースト・アイデンティティは後退した」⁽¹³⁾とするニティーシュ・クマール州首相の主張を額面通りに受け取ることは到底できない。事実、これらの流動的なコミュニティーの投票行動が、今回の州議会選挙の結果を理解する上で重要なカギとなっている。つまり、これらの集団の票が大きく傾いたことが、与党連合の歴史的な圧勝につながったと考えられるのである。

前述の CSDS のサンプル調査に基づいて、この点をもう少し具体的に見ていくことにしよう。まず、下層の後進カースト (Extremely Backward Class: EBC) については、55%が JD(U) と BJP の与党連合に投票している⁽¹⁴⁾。また、パスワン以外の指定カースト (つまり、マハダリット) については、45%が与党連合に投票している。そして、ムスリムについては、与党連合はこれまでの選挙でのパフォーマンスを大きく上回る 21%もの得票率を記録している (表 2-5 を参照)。一方、RJD・LJP 連合および会議派は、それぞれ 32%と 22%の得票をムスリムから得ている [Kumar 2010]⁽¹⁵⁾。これら 3つの社会集団の中で、ムスリムの投票行動の変化はとりわけ顕著である。なぜなら、これまでの州議会選挙と比較して、JD(U)・

⁽¹³⁾ ニティーシュ・クマール州首相へのインタビュー (2010年8月29日)。

⁽¹⁴⁾ Kumar [2010]は「Most Backward Caste」という単語を用いているが、文脈から判断して、これはEBCのことを意味していると考えられる。

⁽¹⁵⁾ ちなみに、2009年の下院議員選挙について行われたCSDSの調査によると、29%のムスリムが会議派に投票した。“How India Voted: Verdict 2009,” *Hindu*, May 26, 2009 を参照。

BJP 連合はムスリムからの得票率を倍以上に伸ばしているからである。

そこで、州政権に対するムスリムの評価を検討するために、著者が行ったサンプル調査における関連項目を見てみることにしよう。表 3-3 は、5 年前と比較してムスリムを取り巻く環境がどのように変化したかという質問に対するムスリムの有権者の回答をまとめたものである。「ムスリムの安全」や「宗派間の融和」という 2 つの質問に対して、「改善した」または「変化なし」という回答が圧倒的に多く、「悪化した」という回答は極めて少数である。また、「過去 5 年の間に、自分が住むコミュニティでムスリムの影響力がどのように変化したか」という質問に対しても、約 75% の回答者が「改善した」または「変化なし」と答えており、「悪化した」と回答したのは約 11% にとどまっている。

州議会選挙のキャンペーンにおいて、RJD や会議派などムスリムの重要な受け皿であることを自任する政党は、州政権の一翼を担う BJP によるムスリムに対する脅威を盛んに訴えていた⁽¹⁶⁾。しかし、サンプル調査の結果を見る限りでは、ニティーシュ政権下でムスリムがより深刻な宗派間対立の脅威にさらされているという認識はムスリムにはない。また、JD(U)は、連立政権のパートナーである BJP との距離を微妙に保ちながらムスリムへの配慮に腐心していたことがうかがえる。具体的には、グジャラート州首相のナレンドラ・モディ (Narendra Modi) や下院議員のヴァルン・ガンディー (Varun Gandhi) などのヒンドゥー至上主義的な姿勢を鮮明にしている BJP 指導者による選挙キャンペーンを頑なに拒否し続けたことや、長年にわたって連携関係にあるにもかかわらず共通のマニフェストを出さないことを早々と決定したことなどから、それが見てとれるのである⁽¹⁷⁾。

ムスリムからより多くの票を獲得したことに象徴されるように、既存の支持層（特に、上位カースト、クルミ、コエリ）に投票行動において流動性の高いグループを加えることで「勝利連合」を形成するというニティーシュ政権の戦略は見事に成功したということができよう。そして、その結果として、野党勢力に対してわずかではあるが着実に差をつけ、獲得議席数の上では圧倒的な勝利を収めることができたのである。

ただし、第 2 章で説明したような特定のコミュニティを対象とした各種の政策（マハラットラおよび後進ムスリムへの福祉政策や下層の後進カーストへの留保政策）が功を奏したためなのか、それとも、これらの社会的弱者層が公共財の供給という開発の恩恵をより大きく受けたためなのかを峻別することは容易ではない。この疑問に答えるためには、より詳細な分析が必要であろう。そのための一つの試みとして、次章では村の政治と関連づけつつ 2010 年州議会選挙を分析する。

⁽¹⁶⁾ “‘Saffron Terror’ Comes in Handy for Lalu, Paswan,” *Hindu*, August 29, 2010; “Sever Ties with BJP, Congress Tells Nitish,” *Hindu*, October 25, 2010 を参照。

⁽¹⁷⁾ “JD(U) Says No to Modi, Varun Campaigning,” *Hindu*, August 9, 2010; “For Nitish, Bihar is still Out-of-bounds for Modi,” *Hindu*, September 17, 2010; “Modi, Varun not in BJP List for Bihar Campaign,” *Hindu*, October 2, 2010 を参照。

<参考文献>

[英語文献]

Association for Democratic Reforms [2010] *Analysis of Criminal and Financial Details of Candidates and MLAs from Bihar* (http://adrindia.org/files/Bihar%202010%20v3_0.pdf).

Kumar, Sanjay [2010] “A Cut and Paste Victory,” *Indian Express*, December 6, 2010.

Subrahmaniam, Vidya [2010] “Mismatch between Nitish Wave and Vote Share,” *Hindu*, November 26, 2010.